

第1章 イギリスにおけるガールガイドの成立と展開

ここでは、イギリスにおけるガールガイドの成立過程について概観してみたい¹。イギリスのガールガイドの成立について確認する目的は、①日本の女子補導団がもともとイギリスのガールガイド運動を導入する形で発足したこと、②日英同盟という友好関係を時代背景として、それは日本の女子青年教育モデルのひとつとされたこと、③ガールガイドは「大英帝国の母」育成の課題に対応したものであったが、その課題は、イギリスから遅れてすすんだ大正期における日本の産業化、都市化に重なるものであったこと、さらに、④総力戦、科学戦としての第一次世界大戦を経て、世界的に認識され始めた女子青年教育の課題でもあると考えたからである。したがって、ここではイギリスにおけるガールガイドの歴史をあとづけ、それによって第2章以降の女子補導団理解の前提のひとつとしたい。

20世紀のはじめ、ロバート・ベーデン＝パウエルが発足させたボーイスカウトの集いに少女の参加があり、これに対応する形で、1910年、ベーデン＝パウエルの妹アグネス・ベーデンを指導者としてガールガイドが発足した。1912年には、アメリカ合衆国ではジュリエット・ローがジョージア州サバンナでアメリカのガールスカウト運動を始めている。第1節では、ガールガイドがイギリスで発足した時代背景を考える上で19世紀末からの青少年教育登場の背景について確認しておきたい。その上で、ガールガイドの成立（第2節）、第一次世界大戦によるガールガイド運動の変化（第3節）、ガールガイド運動の展開（第4節）にしたがって概観を試みたい。

第1節 ガールガイド成立前のイギリスの女子青年教育

イギリスにおいてガールガイド以前の女子むけの青年教育としては、男性のYMCA²に続いて1855年に結成されたYWCA（キリスト教女子青年会・Young Women's Christian Association）、1874年に創立されたGFS（少女友愛協会・Girls Friendly Society）等がある。前者のYWCAは、プロテスタントの全教会的な団体で、「健全な精神、肉体、道徳の発達」機会の提供を目的とする。1855年のロバーツによる祈祷のための会合、1861年のキーナードによる看護婦ホームと少女協会の設立の二つに由来し、1877年に合同して英国YWCAとなり³、家庭教師、裁縫師、商店員、家事使用人、工場労働者等、多くの若い女性を組織する活動となっていった⁴。後者のGFSはタウンゼント（Mary Elizabeth Townsend）によって始められた組織であり、「国教会派の慈善的、保守的協会で、上流階級のレディたちが、労働者階級の少女たちに、本来彼女たちを保護すべき場である暖かい家庭と母親の愛情を与え、それによって、労働者階級の女性が陥りがちなさまざまな誘惑から少女たちを救うことを目的として」おり、「田舎から都会に働きに出てくる少女たちにつきまとう危険を強調し、工場労働や家事使用人などの少女労働、とりわけ少女売春につきまとう諸問題の改善を目標」⁵とした。礼拝、研究、奉仕、親睦を通してキリスト者としての交流を深め、教会、社会、世界への貢献を目的としたものであ

った⁶。両者とも労働に従事する若い女性を対象としており、その後、キリスト教にもとづく活動として日本を含む世界各国に国際的支部が形成された。

YWCAとGFSの他にも、19世紀後半のイギリスでは、ボーイスカウトの先駆とされるボーイズブリゲード、モードスタンレイらによるガールズ・クラブ、雪の花バンド⁷をはじめとした多くの少年、少女クラブが組織された時期であった。その際、イギリスの19世紀後半からの青少年運動の隆盛の背景、とりわけ1880年以降のイギリス社会については、次の指摘がある⁸。

①イギリス資本主義の停滞と労働運動の高揚—1850～1870年代に継続したイギリス資本主義の「黄金時代」と工業的な独占は終わりつつあった。また、技術革新・重工業化によって非熟練労働者が多数生み出され、併行して人口の都市集中心が進んだ。その結果、それまでの保守・自由党の二大政党制、資本家と熟練労働者の労働連合に変化が生まれ、一方で新しい非熟練労働者による労働運動が高揚しつつあった。

②教会の影響後退と危機感—1870年代末からの経済不況による社会主義運動の台頭、イギリス国教会以外のプロテスタント教派の増加によって、それまでの国教会を中心とした「国家の道徳的基盤」が動揺しつつあった。都市化と労働者の非熟練化によって若年就業者の地域的、職業的移動が容易になったが、それは、青少年に対する家族と教会の影響力を低下させることになった。

③生活改善と青少年の余暇活動—都市部を中心として勤労する青少年の精神的、さらに知的、身体的、社会的要求をみたす必要が生まれた。女子青少年に関しても、工場・事務の労働者、家庭教師、ドレスメーカー、都市と農村部の家事使用人に社会的、経済的福祉の必要性に加え、宿泊施設、食事、レクリエーションを含む余暇の充実と仲間意識の醸成をはかることが求められた。

これら3点は、社会構造と青少年の変化にともない、政府およびそれまで精神的な基盤でもあった国教会が中心となって社会対策的な観点から青少年教育を推進した、というものである。なお、19世紀末から20世紀初頭にかけての学校教育と青少年の状況について、さらに、次の点を指摘しておきたい。

④工場法と学校教育法—1833年の工場法によって、綿織物工場以外の工場で9歳未満の児童労働を禁止すること、かつ13歳未満の児童労働者に対する週12時間の就学義務が工場主に課された。また、1944年にはこれを発展させて、月曜から金曜まで週5日間を半日労働とすることなど、就学率の向上がはかられることになった。これらによって、少なくとも9歳未満の児童が保護の対象となり、13歳未満は教育の対象として社会的に認知されていくことになった。このことは、1862年の改正教育令、さらに1870年の義務教育法につながり、「出来高払い制度」、女子の就学率には課題を抱えつつも、初等教育整備の試みは義務教育年限の引上げの動きに結びついていく⁹。

⑤「読み・書き・算術」(3R 'S)を中心とした教育が労働者の子どもたちに拡大される中で、都市部では少年労働に従事する男子、家事労働の担い手となる少女が学校に通学し

ないという課題があった。19世紀末には、都市部において、新聞売り、荷物運び等の低賃金で単純な少年労働が増加する一方で、街頭で不良行動を行う若者たちが「フリーガン」として問題視されるようになった。1899年に南アフリカでのボーア戦争の苦戦、また志願した若者たちの多くに健康上の適性問題が指摘され、「国家的衰退」と「国民の退行」が危機感をもって語られた。その結果、大英帝国を担い手の育成という観点から学校教育が見直され、少年・少女の生活のあり方と教育が検討された。

以上、19世紀末のイギリスでは、世界初の産業革命以降の工業面での独占という「黄金時代」を過ぎ、経済面、社会的で問題が顕在化してきていた。労働運動の高揚、教会の宗教的影響力低下への危惧、青少年教育の生活課題と余暇へ対応として少年、少女のための青少年教育が登場したのである。少年の場合は、大英帝国の担い手となるために勤勉な労働者、また兵士となる資質が求められた。少年の典型的な運動がボーイスカウトの先駆ともいえるボーイズブリゲード（少年部隊・Boys Brigade）であった。この運動は、スコットランドのグラスゴーで日曜学校の教師をしていたウィリアム・スミス（Sir. William Alexander Smith 1854－1914）によって1883年に始められた。彼は、日曜学校の出席率が良くなかった労働者階級の13－17歳の少年を対象に、軍服様式の制服と玩具の木銃をもたせて宗教教育と軍隊的訓練を実施した。彼らに日曜学校への出席と同時に、愛国心と集団的団結心を持たせることを目的としたこの運動は、聖書教育と軍隊的な集団行進を取り入れたもので、少年たちにも人気を呼んで全国に結成されたのである。

これらの少年への取り組みに対して、少女の場合の目標は「大英帝国の母」であった。19世紀初頭から、慈善学校（Charity School）、おかみさん学校（Dame School）で、少女向きには「読み書き算術」以上に裁縫が重視されていたが、19世紀後半の改正教育令、義務教育制度において裁縫は必修科目として位置づけられた¹⁰。さらに洗濯、料理の実習が取り入れられ、科目名も家庭科、家政学に発展し、その中で、少女たちに対しては衛生観念、服従、忍耐、注意深さ、集中力の養成がはかられていったのである。女子のための青少年教育であるGFS、ガールズ・クラブ等の団体では、学校教育と同様に「女性らしさ」が強調され、ヴィクトリア朝の性別分業観にもとづいた「良き妻、良き母」養成が課題とされたのである。

第2節 ボーイスカウト、ガールガイドの成立

少女のためのガールガイド、ガールスカウトのルーツはボーイスカウトにあり、いずれもロバート・ステューブソン・パウエル（Robert Stephenson Smith Baden=Powell、1857－1941・以後、本文中はベーデン・パウエルと記述する）によってはじめられた。ボーイスカウト構想を含めたベーデン・パウエルの足跡についてまず確認したい。

ベーデン・パウエルは1857年2月22日にロンドンのウエスト・エンドに生まれた。彼の父親は進歩的な神学者、牧師でありオックスフォード大学教授でもあった。母親ヘンリエッタ・グレースは海軍提督を父に持ち、イギリスにおける女子パブリック・ハイスク

ールの初期の卒業生であり水彩と音楽に親しんだ。ロバートが3歳の時、父が亡くなったため、家族の姓はそれまでの「パウエル」から「ベーデン・パウエル」に変更された。

ベーデン・パウエルは、チャーターハウス・スクールに通い、英国陸軍に入隊し19歳で騎兵士官候補としてインドを任務地とした。特別の訓練を受けた後に、従軍し、その経験を経てボーイスカウト運動を開始した。彼がはじめてスカウト運動につながる少年を起用したのはボーア戦争時代（1899-1902）の南アフリカ滞在時代のことである。大佐としてマフェキングの司令部に在任中、周囲をボーアの大軍に長期間包囲され、危機的状况におちいった彼は、現地の少年を選抜して「見習い兵団」を組織した。少年たちは伝令、郵便配達、見張りなどに活躍したが、この経験は、彼自身に青少年に対し訓練と責任を与える必要性を確認させた。また、マフェキングの包囲戦自体もイギリスの援軍の到着によって勝利したため、ベーデン・パウエルは帰国後、全国民に注目される英雄となった。彼は、名門のチャーターハウスに在学しながら、オックスフォード大学受験には失敗して陸軍に入隊した。軍内部でも本来は決してエリートコースではなかったが、偵察、教育活動によって独自の才能を発揮し、軍上層部、さらに国民に注目された人物であり、その点のエピソードも多い¹¹。

帰国後のベーデン・パウエルはイギリスの少年に「将来」に備えて、チームワーク、リーダーシップ指導を計画した。また、斥候となること、尾行を行い、オリエンテーリングの技術を教えることを決断し、これがいかになされるべきかについて、『スカウティング・フォア・ボーイズ』（Scouting For Boys）の原案を1906年に執筆した。その後、『動物記』で有名なアーネスト・シンプソン・シートン（Earnest Thompson Seton）のウッドクラフトに森林生活法とキャンプの技術を学び、1907年にはパブリック・スクールと労働者の子どもたちによるブラウンシー島の実験キャンプを経て、1908年に『スカウティング・フォア・ボーイズ』を発刊した。構成は次の通りである¹²。

- 第1章 スカウト技能（SCOUTCRAFT）
- 第2章 追跡法（TRACKING）
- 第3章 森林生活法（WOODCRAFT）
- 第4章 キャンプ生活（CAMP LIFE）
- 第5章 運動の展開（CAMPAIGNING）
- 第6章 スカウトの忍耐（ENDURANCE FOR SCOUTS）
- 第7章 騎士道（CHIVARY OF THE KNIGHTS）
- 第8章 人命救助（SAVING LIFE）
- 第9章 愛国心（PATRIOTISM）
- 第10章 指導者への覚え書き（NOTES FOR INSTRUCTOR）

市民教育、愛国心、自己犠牲、観察力、推理力、火の扱いかた、調理、救急法、国旗な

どがキーワードとして登場し、彼自身の軍隊での経験と自然観察、さらにシートンのキャンプ技術が反映されたものになっている。ベーデン・パウエル自身は、この本を YMCA、ボーイズブリゲードの参考にしたといわれるが、彼が注目された人物であり、少年たちをひきつける内容であったことからイギリス各地でボーイスカウト活動が組織されていった。先にも述べたように、19世紀末以降のイギリスでは、経済面、社会的で問題が顕在化し、国家と国民の「衰退」が指摘されていた。大英帝国の担い手となるための勤勉性、また兵士となる資質に関わる訓練を含み、青少年教育の興味関心と余暇へ対応するボーイスカウト活動は、ベーデン・パウエル個人へのマスコミの注視の中で、急速に発展したのである。

以上がベーデン・パウエルとボーイスカウト出発の概要である。次に、ガールガイドとの関係について述べてみたい。スカウティング・フォア・ボーイズとボーイスカウトの構想は、少年のみではなく少女たちにも関心を示し、このスカウト活動へ参加希望する少女が登場した。当時のイギリスでは、女性の活躍するモデルとして燈台守をしていた父とともに難破船の乗組員を救助したグレース・ダーリン (Horsley Darling・1815-1842)、クリミア戦争で負傷兵を看護し、近代看護報看護法の創始者であるナイチンゲール (Florence Nightingale・1820-1910)、アフリカ探検家のミス・キング看護婦が注目されていた。彼女たちの存在は、若い時代に女性と少女が少年と同様、スカウティングを学んだならば、将来世界中で活躍できることを示すストーリーとして紹介された。

1909年、かつての万国博覧会の会場であったクリスタルパレスで1万1千人が参加したボーイスカウト・ラリーが開催された。そこには、各地で自主的に組織されていたスカウトの服を着た少女が参加した。彼女たちは、自らを「ボーイスカウト」に対応する「ガールスカウト」と称し、スカウトの帽子をかぶり、スカウト・バッジとスカーフ、ベルト、ポールを持っていた。彼女たちはバックを背負い、左の腕にはパトロールカラーを示すリボンをつけていた¹³。ベーデン・パウエルは少女がスカウトになりうることをスカウト誌上で認めてはいたが、少女に対応した考えを明確に持っていたわけではなく、彼女たちに合わせた枠組み—ガールガイドの構想、を検討することになった。

まず、目的と性格について。ベーデン・パウエルは、ヴィクトリア朝時代に育ち、人生の大半を軍隊で過ごした人物である。ボーイスカウトに「少年らしさ」と将来の大英帝国の良き市民、兵士となることを求めたのと対照的に、ガールには「少女らしさ」と将来の大英帝国の良き妻、母像を描いた。「ボーイスカウトの訓練は、イートンからイースト・ハムのあらゆる少年にじゅうぶん適したものであるが、それをすべての少女に応用しようとするのは、彼女たちに合わせてボーイスカウト綱領を細部まで変更したとしても不可能である。少女の場合には、まったく異なった方法で運営されなくてはならない。洗練された少女たちをおてんば娘 (tomboys) にしたくないし、一方で、スラムの少女をすさんだ生活からより良い方向に導きたい。重要な目的は、すべての少女により良き母になり、次世代をガイド (導く) する力量を身に付けさせること」¹⁴であった。

次に、ガールガイドの名称について。彼が名称について考えた時に想起されたのは、インドにおいて「ガイド」とよばれた人々からの強い印象であった。このインドの人々は北西部の辺境地域に暮らし、危険な遠征を主な役割として任務時間以外でも心と体を鍛錬した。この点が、ベーデン・パウエル的心に残っていたために、彼は先駆的な若い女性の呼称としてガールガイド(Girl Guides)を決断した、とされている¹⁵。彼らの「困難な状況でのひろい知識、臨機応変の対応、求められた義務を遂行するように訓練された集団」であることに倣って、「勤勉と実用的な常識、さらに自律的である」存在としてガールガイド(Girl Guides)の名称が決定された¹⁶。

その結果、示されたガールガイドの初期の訓練と組織の概要は下記の通りである¹⁷。

【制服】

団(company)カラーのジャージ生地。ネッカチーフも団の色。スカート、半ズボン、ストッキングは濃紺。帽子は四角い赤のビレタ帽、夏は麦わら帽子。布のバック、料理用の棒、ひもを付けたナイフ、歩行用の棒、背中をとめたケープ。グループカラーの肩章、を左に。バッジはボーイスカウトとほぼ同様に。役員は通常の団のウォーキングドレス、濃紺のビレタ帽、白い肩章、歩行棒、ひも付きの笛。

【二級ガイド】

左腕に「そなえよ、つねに(Be Prepared)」の標語、少女はなるべくはやく団ルールのテストをパスすること。火を扱い、寝床を準備する。ユニオンジャックを切り抜き、縫うこと。

【一級ガイド】

百合(Fleur-de-lis)のバッジを左腕に。銀行に1シリング貯金する。簡単な料理が出来ること、救護法として簡単な包帯巻き、病院の基礎的手当てを知ること。

【技能バッジ】

テスト合格後、右腕につける。

1. 救護法(First Aid) スカウティング・フォア・ボーイズにもとづく、事故への対処
2. 追跡(Stalking) 少年と同様の観察と自然学習
3. 看護の仲間(Nursing Sister) 救護所勤務、衛生
4. 調理(Cook) 少年と同様の調理、洗浄、食卓準備
5. 自転車(Cyclist) 少年と同様
6. 地域案内(Local Guide) 地域の歴史を学び、ガイドする。少年と同様に救護所、消防署、警察、電報局などを把握する
7. 保育(Nurse) 子どもの世話、保育、ゲーム、児童指導の基礎
8. 音楽(Musician) 少年と同じくピアノ、歌唱のどちらか
9. 体操(Gymnast) 身体的訓練の指導力と理論

- 1 0. 電気(Electrician) 少年と同様
- 1 1. 裁縫(Tailor) 手芸と器械による裁縫
- 1 2. 書記(Clerk) 少年と同様にタイプ、速記など
- 1 3. 栽培(Florist) 少年と同様、加えて花を育て、花束をつくること
- 1 4. 芸術(Artist) 油絵、水彩画、粘土細工、木彫り、彫金
- 1 5. マッサージ(Masseuse) 解剖学とマッサージ
- 1 6. 電信(Telegraphist) 電気の基礎、モールス信号を読む
- 1 7. 水泳(Swimming) 制服で50ヤード泳ぐ、水中での実践的救助法
- 【先駆】(Pioneering) 少年と同様、大工仕事、模範づくり
- 【水兵】 少年と同様、ボート操作
- 【手旗信号】 少年と同様
- 【赤十字腕章】 NO, 1 から 3 まで
- 【救命法】 少年と同様に、シルバー、ブロンズ
- 【グループ名と紋章】 愛らしい花の名前による呼称とする
- 【階級】 キャプテン(Captain)、副官(Lieutenant)、グループリーダー(Group Leader)、副リーダー(Sub Leader)、1 班 6 人のガイド(Six Guide per Group)
- 【訓練】 ボーイスカウトと同様に宗教的訓練を行う (全く宗派的なものではない)
 - 1. 精神面—自然を学ぶことによる神の理解
 - 2. 実践面—日々の善行、騎士道、慈善による他者への義務

以上を概観してわかるように、ボーイスカウトを下敷きにした計画であり、同様の活動が大部分をしめている。屋外での活動については少女むけとしては、従来の学校教育、GFSで奨励されたものとは異なるものであった。しかし、看護、保育、裁縫、栽培活動等に少年むけとは異なる内容が含まれていた。また、1910年代までは、少女のキャンプについて異論も存在し、明確に位置づいていなかった。その点では、「少女のための組織が母性を軸としていた」¹⁸ことは、明らかである。また、「名称へのこだわりは、パトロール隊の命名にもみられ」¹⁹た。ボーイスカウトの狼(Wolf)、狐(Fox)、のらねこ(Wildcat)に対し、バラ(Rose)、矢車草(Cornflower)などの花の名前が用いられた。

スカウト運動は本来、男子の青少年を対象に「大英帝国」を担う男性を育成するために始められたものである。たしかに、ベーデン・パウエルは、女子のスカウト活動を否定していたわけではなく、1908年の『ザ・スカウト』では「少女はスカウトになれるか」との問いには、肯定的な回答をしている²⁰。むしろ、彼自身はスカウトの訓練の理念が当時の少女の興味をひくものであったことを予想せず、それゆえ、1909年まで少女たちを組織することに積極的ではなかった、と考えられる。しかし、実際には1909年以前にもかなりの数の少女がスカウトに入会しており、結果的にベーデン・パウエルは、少女たちの組織化に際し、男女を区別することを考えたのである。先に述べたように、インド

の例を考えながら少女組織の名称も「斥候」を意味する「スカウト」よりも「ガイド」(案内、補導者)がふさわしいとしてガールガイドと名付け、女性による指導者として妹のアグネス(Agnes Baden Powell 1858-1945)²¹にその代表者を依頼した。

ガールガイドの計画は1909年11月にスカウト本部の機関紙において発表され、ベーデン・パウエルはアグネスとともに、初めてのガールガイドのハンドブックである『少女たちは大英帝国の強化に貢献できるか』(How Girls can Help TO BUILD UP the Empire—THE HANDBOOK FOR GIRL GUIDES)を執筆した。翌1910年、ガールガイドの中央委員会が結成され、それは1915年にはガールガイド協議会の中央執行委員会(Executive Committee of the Girl Guides)が開催された。ベーデン・パウエルはアグネスに運営を委ねた。アグネスは動物学、植物学、天文学に通じており、また、自動車や熱気球など新しい発明にも強い関心を示していた。彼女はこの運動のチーフガイドを1910年から1917年までつとめ、彼女自身、後に自らを、「ガイドのおばあちゃん」(Grandmother of Guiding)と呼んでいる²²。

新しく始められたガールガイドは誓いをたて、それに対して資格証とバッジを与えられた。少女たちは救護法、手旗信号を实践し、練習と鍛錬を行い、キャンプに出かけ、彼女たちはテントの代わりにしばしば納屋や牛小屋であるいは村の集会所で眠った。活動の当初、ガールガイドは多くの「反感」に直面した。ベーデン・パウエル自身に性別分業観が支配的であったことは先に述べたが、それ以上に多くの人々にとって、若い女性が郊外を歩きまわり、「奇妙」な服装をし、少年のような行動をすることはふさわしくないと考えられ、批判も生まれた²³。ガールガイドの最初のチーフガイドとなったアグネスは、「女は女らしく」というヴィクトリア朝的な価値観の持ち主であったが、一方で少女のキャンプ活動をはじめとして少年たちと同じ活動をのぞむ要望も存在したのである。アグネスのもとで、ガールガイドは、ボーイスカウトのモデルに従うべきではなく、料理や看護など「女性的な」活動をおこなうべきであるとされていた。1913年に中央の委員会が、アウトドアのキャンプをすべきではないと宣言したときにも現場の反対にあい、最終的に、各地域にこの問題の決定権を委ねるということで決着している²⁴。

なお、1914年には、現在のブラウニーの原型が誕生している。ガールガイドの妹たちもガイドの活動への参加を希望し、彼女たちのための部局が設置された。当初ブラウニーはローズバッド(Rosebuds)と呼ばれ、濃紺の制服にアグネスがデザインしたバッジをつけていた。しかし、少女たちの多くはこの呼称を好まなかったことからブラウニー(Brownies)に変更された。バッジもドングリをデザインしたものに変わり、制服の色も茶色に置き換えられた。ガールガイドにおけるバッジは、ボーイスカウトと同様に獲得した技能に応じて与えられるものでもあったが、ガイド独自に、料理、船員、画家、洋裁、事務、さらに、電気、通訳、電信などのバッジがつくられている。なお、技能バッジは1917年にブラウニーにも導入された。

第3節 第一次世界大戦によるガールガイド運動の変化

第一次世界大戦という総力戦がこの状況を大きく変化させた。ガールガイドが実践していた技術が第一次世界大戦という総力戦の日々の中で有効であることが証明され、また、彼女たちの行った仕事の多くが初期の「反感」を一掃した。ガールガイドのパンフレットにあった次の一文が大きな意味を持った。

「少女たちよ、あなたの町や村のまわりでおきている戦いを創造してごらん下さい、あなたは何かができますか？あなたは座りこんで、頭をかかえて嘆いているだけでですか？それとも勇気を持って、外に出てあなたのかわりに戦い、たおれていくお父さんや兄弟たちのために何か手助けをしますか？」²⁵

戦時奉仕バッジ(A War Service Badge)が導入されると、少女たちは病院あるいは類似の施設で少なくとも21日間の奉仕を行い、靴下、手袋、シャツ、パジャマ、ベルト、寝巻きを含む15種以上を編んだ。ガイドとして彼女たちは部屋を緊急介護所に変え、赤十字病院で皿洗いや洗濯のために働き、包帯と消毒綿を準備した。救護兵舎、ガールガイドの配置された病院の兵士に供給するために支援物資と資金をあつめたのである²⁶。以上のように第一次世界大戦を機会にガールガイドの活動と存在は変化をみせることになった。それはイギリス社会の中での女性の位置と役割の変化に対応したのもであった。

第一次世界大戦の始まる1914年以前のガールガイド活動は小規模なものにとどまっていたが、ガールガイドは多様な活動に取り組み、また、社会的に注目された。総力戦の下、参戦国の女性は積極的に銃後活動に参加せざるを得ない状況が生まれていた。戦時体制は女性が家の外に出るという意味においてある面「画期的」な結果をもたらし、社会の女性に対する考え方も微妙に変化していった。この点において、ガールガイドの内外に多大な影響を与えたのである。1916年のベーデン・パウエル の文章においても、それまでのガールガイドで強調された「妻・母」や「女らしさ」の理念はややトーンダウンし、「市民」としての役割が強調されるようになった²⁷。

以上のように、イギリスにおいてガールガイドは、その発足時には良き妻・母になることに重点を置かれ、ヴィクトリア朝の女性観を反映していたものであった。しかし、第一次世界大戦を経てその女性像は変容をみせ始めた。欧米では女性参政権が実現された時期でもある。社会の女性に対する考え方の変化が少女たち、そしてガールガイド運動にも反映された。

こうした変化は、1912年にベーデン・パウエルがオレブ・ソームズ(Olave St. Clair Soames 1889-1977)と結婚し、彼女が後に英国ガイドの中で主要な位置を占めていく過程とも関連している。オレブはB. パウエルの援助のもとにガールガイドの組織内で次第に影響力を及ぼすようになり、1918年にはチーフガイドに就任する。彼女はそれまでのアグネスの考え方を批判し、女性の社会参加と自信ある女性になる側面を重視した。また、「女性らしさ」や家事分担者としての女性の役割を重視する点が存在したものの²⁸、アグネスと比較して女性が単に夫に従属するものでなく、パートナーである点を強

調している。そこでは、時代とイギリス社会の変化と同時に、ベーデン・パウエル自身が若い世代の女性と結婚したことから来る影響も推察される。総力戦による社会の中での女性への期待の変化、指導者であるベーデン・パウエルの結婚—配偶者となったオレブの役割がこの時期のガールガイドの変化に関する大きな要因として捉えられよう。

1918年時点のガールガイドの目的と、行動の規範となる約束とおきての原文²⁹（カッコ内は1922年に『日本女子補導会便覧』³⁰で翻訳して示されたもの）を提示すると以下の通りである。

1. CHARACTER AND INTELLIGENCE, through games, practices and activities, and honours and test for promotion.

（人格の養成及び知識の開発 遊戯、試験、名誉及び活動等に於て）

2. SKILL AND HANDCRAFT, encouraged through badges for proficiency.

（手工技芸 各科に於ける会員の上達を示す徽章等により）

3. SERVICE FOR OTHERS and FELLOWSHIP, through daily good turns, organized public service, etc.

（他人に対する奉仕 日常行ふ事の出来る親切な行為、或は組織だった公共的奉仕により）

4. PHYSICAL HEALTH and HYGIENE, through development up to standard by games and exercises design for the purpose.

（体操、遊戯、舞踏、散歩また健康増進についての法則）

THE GUDE PROMISE.

（会員の契約）

On my honour I promise that I will do my best—

TO DO MY DUTY TO GOD AND THE KING,

（神と天皇に忠誠たるべきこと）

TO HELP OTHER PEOPLE DAILY,

（常に人々の補助たらんと務むべきこと）

TO OBEY THE GUIDE LAW,

（会則を守るべきこと）

THE GUIDE LAW.

（会則）

1. A Guide's honour is to be trusted.

（会員は信頼せらるべきものたるべし）

2. A Guide is loyal to king and her officers, and to her parent, her country, and

parents, her country, and her employers or employees.

(会員は天皇と国家に対し忠良なる臣民のみならず、凡て其尊長に忠誠なるべし)

3. A Guide's duty is to be useful and to help others.

(会員は常に人の益を計るべし)

4. A Guide is a friend to all, and a sister to every other Guide, matter to what social class the other belongs.

(会員は凡ての人に親切を尽し、会員相互の間は姉妹の如く交るべし)

5. A Guide is courteous.

(会員は礼儀正しくすべし)

6. A Guide is friend to animals.

(会員は動物を愛護すべし)

7. A Guide obeys orders of her parents, patrol leader, or Captain without question.

(会員は命令に服従すべし)

8. A Guide smiles and sings under all difficulties.

(会員は如何なる困難に遭遇しても常に快活なるべし)

9. A Guide is thrifty.

(会員は勤儉なるべし)

10. A Guide is clean in thought, word, and deed.

(会員は思想、言語、行為に於て純潔なるべし)

第一次世界大戦を経て、イギリスのガールガイドではキャンプなどボーイスカウトの訓練で使われているほとんどの活動が推奨されるようになり、1920年代にキャンプはガールガイドの中心的な要素となった。国内外の会員数も増加し、1909年に約6千人、1914年に4万人であったものが、大戦中の1916年以降急激に増加し1921年には16万4千人、1932年には49万5千人になった³¹。それにともなって、ガールガイドに参加した少女たちの出身階層も賃金労働者家族が増加した。

1920年、ジョージ5世 (King George V.) の娘であるメアリ (Princess Merry) がガールガイド協会の総裁になり、彼女は生涯を通じてこの運動の支持者となった³²。1922年には、ハンプシャーにフォックスリース (Foxlease) と呼ばれる施設が完成した。周囲65エーカーにおよぶ建物と敷地はアークボルド夫人 (Mrs. Archbold Saunderson) によって寄贈されたものであるが、メアリーがこの施設の維持するための資金を提供したためにプリンセス・メアリー・ハウスの名が与えられ、ガールガイド協会の最初のトレーニングセンターとなった。それ以降、イギリス各地に多くの施設が建設された。初期の時代からガールガイドはイギリスに限定されたものではなく、オーストラリア (1910)、カナダ (1909)、デンマーク (1910)、フィンランド (1910)、南アフリカ (1910)、スウェーデン (1910)、アイルランド (1911)、フランス (1921)、などが各国

独自の組織をつくってベーデン・パウエルプログラムを実践した。

なお、アメリカ合衆国では、ジュリエット・ロー (Juliette Gordon Low 1860～1927) によって、1912年にガールスカウト(Girl Scout)として運動が始められた。ジュリエットは、ジョージア州サバンナに生まれ、イギリス人男性と結婚した。夫と死別後1911年にベーデン・パウエルと出会ったことを契機にして、翌12年から故郷サバンナで同活動を始め、1913年にはハンドブック『How Girls Help their Country』を出版している。アメリカでは、その発足時からガールスカウトと呼称され、野外活動や自然理解、人格養成を援助し、家庭内役割と同時に職業 (professional role) を身に付けさせるものであることが明示されている³³。1916年にはワシントンDCに本部がおかれ、第一次、第二次世界大戦時には廃品回収や国債に協力した。1926年には会議訓練センターが設置され、大会時には大統領が臨席し、国家的に認知されたものとなり³⁴、イギリスのガールガイドとともに女子青少年教育団体として多くの会員数を擁することになった。

1919年には、国際協会(International Council)と帝国協会(Imperial Council)がつくられ、多くの国々のガールガイドとガールスカウト協会との間の連絡と運営が行なわれることになった。この協会は現在のガールガイド・ガールスカウト国際連盟(the World Association of Girl Guides and Girl Scouts)のはじまりである。1920年に第一回世界会議(World Conference)がオックスフォードで開かれ、1924年にはフォックスリスで最初の世界キャンプが開催されている。なお、この年からボーイスカウトでは1924年国際スカウト会議(コペンハーゲン)で「スカウト教育はいかなる宗教の上にも成り立つ」という宗教的普遍性が宣言(コペンハーゲン宣言)されている。ガールガイド、ガールスカウトも同様な対応を行なうことになった。1926年、世界会議がアメリカ合衆国で開かれた際(Edith Macy Training School USA)、ベーデン・パウエルとオレブの誕生日が同じ2月22日であることから、シンキング・デー(Thinking Day)が制定され、翌年から「世界中の姉妹について考える日」として実施された。

その後、第二次世界大戦が始まると、ガールガイドは他の団体や機関とともに実践的にも財政的な面からも戦時協力を行なった³⁵。再利用可能なすべてのものを収集し、素材はまったく無駄なく活用した。例えば、家畜の骨は爆弾のためのグリセリンとして、工場には膠を、さらに家畜用にも提供された。使用済み乾電池は、真鍮、亜鉛、パラフィンろう、二酸化マンガンになり、松かさも燃料として収集された。何より、イギリスにおいては学童疎開への協力が大きなものがあった。ドイツ軍の空爆が始まると都市部の子どもたちは、安全のために地方部に疎開した。子どもたちが歓迎されたと感じるように、ガールガイドは出迎えをおこなった。イルフォード、エセックスでは、年長のガイドたちは、疎開をせず、また教師もいない子どもたちのために学校を始めることを地区から許可された。募金活動もさかんに行なわれ、年少のガイドはおこずかいを、年長者は日給の半分を募金にあて、それによって多くの野戦病院、救命ボートが寄贈された。陸軍のために伝書鳩が訓練、飼育された。さらに、一部のガイドと年長のレンジャーは、GIS(Guide International

Service)=戦後ヨーロッパの再建を手助けすることを目的としての「善意の軍」(army of goodwill)を結成した。GISの第一陣は1944年にヨーロッパ大陸に向かい、同時にエジプト、マライ半島にもむかった。彼女たちは、戦地において運搬用荷馬車をひいて運搬作業等に携わった。

第二次世界大戦が終了すると、英国のガールガイドはヨーロッパでのあたらしい関係を構築していくことになった。1947年にはベルギー、チェコスロバキア、デンマーク、オランダ、スイス、アメリカから集まったガールガイド、ガールスカウトによる大規模な民謡フェスティバルが開催され、ハイパークでは、国々のダンスが披露された。この年、婚約を控え、また大英帝国のチーフ・レンジャーでもあったエリザベス王女が妹のプリンセス・マーガレットを伴ってあいさつをしている。ガールガイドは結成以来40年近くの間、二つの世界大戦を経て、イギリスにおいては皇室もかかわる国家的、かつ国際的な運動として定着したのである。

小結

ガールガイドの背景には、19世紀末からイギリスが、かつての「黄金時代」を経過して経済面、社会的で問題が顕在化した時代があった。教会の宗教的影響力低下への危惧、都市化と青少年の生活、余暇へ対応の課題として登場した青少年教育のひとつと捉えることが出来る。ガールガイドはベーデン・パウエルが発足させたボーイスカウト運動から分岐した形で発足したものであるが、少年の場合の目的が「大英帝国」の勤勉な市民、兵士、労働者となる資質を求めたものに対して、少女の場合は「大英帝国」の母であり、良き妻の姿であった。1910年に正式に発足したガールガイドは、当初ボーイスカウトと同様の活動を基本としながら、救護、保育を中心にことなるプログラムも存在し、キャンプへの参加をはじめ内外で少女むけの活動としての適否が問われた。しかし、第一次世界大戦の中で状況は大きく変化した。総力戦の中で、急速に女性の社会参加が進んだこと、結果として女性の地位向上がはかられたこと、また、ガールガイドそのものも戦時の救護と支援に活躍したこともあって、少女の活動としての認知を得ることになった。ベーデン・パウエルの妻、オレブが指導者として新しい女性像を示したこともあり、運動はよりイギリス国内外で発展を示すことになった。このイギリスで誕生した運動は、1920（大正9年）年、日本に紹介された。

註：

¹ Vronwyn M. Thompson 『1910...AND THEN?』 Guide Association 1990、3 ページ。
なお、邦訳を含めた主たる文献として下記のものがある。
ガールスカウト日本連盟『半世紀のあゆみ』1970年。
『ベーデン・パウエル伝』ボーイスカウト日本連盟
『ベーデン・パウエルー英雄の2つの生涯』産調出版（原書 William Hillcourt with

Olave, Lady Baden-Powell, *Baden-Powell: the two lives of a hero*, London, 1964)

ボーイスカウト日本連盟『日本ボーイスカウト運動史』1973年。

日本ボーイスカウト大阪連盟『大阪ボーイスカウト運動史』1973年。

猪瀬久美恵『子どもたちの大英帝国』中央公論社・1992年。

田中治彦『ボーイスカウト』中央公論社、1995年。

上平泰博、田中治彦、中島純『少年団の歴史』萌文社、1996年。

Allen Warren 'Mother for the Empire?': The Girl Guides Association in Britain, 1909-1939

Mangan, J.A. *Making Imperial Mentalities: Socialization and British Imperialism*, 1990.

2 キリスト教青年会(Young Men's Christian Association)は、都市で労働する青年のためのキリスト教の組織。1844年にジョージ・ウィリアムズによって、イギリス・ロンドンで創立された。

3 欧米各国、さらに世界でこの運動はひろめられ、1894年には世界 YWCA が組織された。現在、世界 YWCA の加盟国は八十余カ国で、会員数は約 800 万人になっている。日本 YWCA は、早稲田の大隈重信邸で 1905 (明治 38) 年に創設された (初代会長は、女子英学塾の津田梅子)。

4 竹内真一『青年運動の歴史と理論』大月書店・1976年、178-179ページ。

5 猪瀬久美恵『子どもたちの大英帝国』中央公論社・1992年、228ページ。

同書によれば、『少女友愛協会』がウィリアム・スミスの『少年部隊』の少女版であることを明言し、国教会の教区牧師たちにリーダーを依頼し、イングランド南部の農村部を中心に、10年間に支部を821にまで急増させることに成功している。活動の中心は、少女を『堕ちた女』にしないよう、レスpekタブルな職場の確保におかれたが、少女たちを安い労働力として雇用したいと願う工場主からの激しい反発にあい、次第に活動方針を、上流、中産階級家庭の家事使用人の雇用開拓に絞るようになった。

6 平安女学院短大愛友会『地の塩』NO.1、1963年、25ページ。日本では、1916 (大正 5) 年、アメリカ人宣教師マギルによって京都の平安女学院生徒の宗教活動としてはじめられた。戦後はアメリカ聖公会 GFS 会員、八代斌助日本聖公会主教の指導もあって、関西地区の教会、施設、学校で活動が行われた (日本聖公会 GFS『GFS のあゆみ(1916-1996)』)。

7 前掲『子どもたちの大英帝国』230ページ。GFS と並ぶ少女クラブ活動で、1889年に、ナンネレイにより工場で働く少女たちを対象として設立された。

8 前掲『青年運動の歴史と理論』178-184ページ。

9 前掲『子どもたちの大英帝国』112ページ。なお、ブライアン・サイモン (成田克矢訳) 『イギリス教育史』II、亜紀書房・1977年、を参照されたい。

10 前掲『子どもたちの大英帝国』215-218ページ。

11 例えば、ドイツ・フランス陸軍の演習を偵察した際に、蝶の収集家に変装して偵察し、その軍事施設の見取り図を、蝶の羽根のスケッチに偽装してその軍事施設の見取り図を描いたこと。腕時計を最初に使用した軍人であり、それまで海軍では用いられていた手旗信号を初めて陸上で使用した、等のアイデアを含むエピソードが多い。兵舎生活の中の即興劇、偵察活動の際の環境・自然観察などは、後年のボーイスカウト、ガールガイドの活動に反映された。

12 『Scouting For Boys』(ボーイスカウト日本連盟所蔵)、および前掲『少年団の歴史』28-29を参照されたい。

13 前掲『1910...AND THEN?』4ページ。

14 Rose Kerr 'The Story of Girl Guides' London 1932(repub.1976) p.29.

15 Op.cid.p35。

-
- 16 Op.cid.p35。
- 17 Op.cid.pp31-33。
- 18 前掲『子どもたちの大英帝国』233 ページ。
- 19 同前。
- 20 前掲『少年団の歴史』萌文社、45 ページ (The Scout,16 May 1908,' Can Girls be Scouts? 'cited in Jeal,p.469)。
- 21 ガールガイドの組織はなかなか伸張しないこと、1917年には、チーフを辞任したが、1945年に86歳で死去するまでガールスカウト副議長を勤めた。
- 22 前掲『1910...AND THEN?』4 ページ。
- 23 同前。
- 24 ibid. Allen Warren, ' Mother for the Empire? 'pp.102 - 103。
- 25 ibid' The Story of Girl Guides'p.73。
- 26 前掲『1910...AND THEN?』、5 ページ。
- 27 ibid。
- 28前掲『子どもたちの大英帝国 世紀末、フーリガン登場』236 - 238 ページ。なお、アメリカでは同運動は1912年にはじまったが、その名称はイギリス式の「ガールガイド」ではなく「ガールスカウト」として発足した。なお、次の文献参照した。
Eileen K.Wade,'THE WORLDCHIEF GUIDE': The Story of LADY BADEN-POWELL Hutchinson of London,1957。
- 29 Robert Baden-Powell. Girl Guiding The Official Handbook, C.Authur Person Ltd.1920, p11,p51.
- 30 女子補導会本部編・坂西志保子訳『女子補導会』基督教興文協会、1922年、1-2 ページ、40-41 ページ。
- 31 ibid. Allen Warren,1990
- 32前掲『1910...AND THEN?』8 ページ。
- 33Fern G .Brown,Daisy and the Girl Scout,Albert Whitman and Company.1996。
- 34MildredM. Pace,JULIETTE LOW,The Jesse Stuart Foundation,1997。
- 35前掲『1910...AND THEN?』14 ページ。